

目 次

|               |        |
|---------------|--------|
| □合理的に         | 湯原元一   |
| □感謝の辭         | 中川謙二郎  |
| □暗黒面に就いて      | 中川謙二郎  |
| □平安朝貴族の風雅趣味   | 關根正直   |
| □倭繪に就きて       | 下村三四吉  |
| □衣服の話         | 菅原教造   |
| □西洋音樂の發達に就きて  | 田邊尙雄   |
| □現代日本畫の傾向     | 志賀篠崎   |
| □感想           |        |
| □向ひの岡         | 尾上柴舟   |
| □詠草より         |        |
| □えんそく         | □旅行    |
| □去年度國語教授界の諸研究 | □雜報    |
|               | □參考書研究 |

合理的に

湯原元一先生講話

東西の婦人を比較して見れば種々の點に於て長短があるが、その著しいものを求めてみれば、先づ第一に何人も眼につくのは體格の事であらう。女子の體育といふ事については今日は上下共に力を盡して居るが、併しこの體格なる物は永い間の遺傳の結果であるから、出来る丈の事をしなくてはならないのは勿論であるが、如何に努力してもさう一朝一夕には彼と比肩し得る様には至るまいと思ふ。次に著しいのは、理性即ち Vernunft の發達に於て我が大に劣つて居るといふ事である。この理性の養成といふ事については歐洲諸國中でも、最ドイツが重きをおいてやつて居る事で、ドイツの文化についての研究は今日は餘程盛になつて來た。最近の新聞に依れば、英國のエヂンバラの大學では、特に多額の金員を支出してドイツ研究なる講座を設け、其の教授の人選を行つたといふ事であるが殆どその血族を同うして居る英人にして今更の如くにこの舉あるを見れば、如何に今日迄ドイツの文化が一般に理解されずに居たかといふ事が解る。戦争前に於る英人多數の意見は、ドイツが學術的方面に於て優秀なる事は充分に之を認めるが、一般文化の價値如何については大に之を疑ふ、といふに在つた。時局發生後に於る英國の輿論は、ドイツは學術に於ては優秀であるが、彼等の學術は彼等の文化とは全く没交渉で、ドイツ人は依然たる野蠻人である、唯偶々學術に於て優秀なる位地を勝得たにすぎない、と云ふ様に、口を極めて譏つて居た。佛國とても同様であつた。然るに其後

に於る戦局推移の状態を見ると、中々この批評は中つて居ない。素より随分獨人には人道に反した様な行も  
多いが、一面に於ては、戦争に勝れて居るのみならず、殊に舉國一致以て國難に當ると云ふ美德は遺憾なく  
發揮され、愈々窮すれば愈々奮起して、その國家の基礎の如何に固くあるかは着々として證明されて來た。  
此に於て今迄野蠻と譏つて居た英國も敵ドイツの今日在る所以を研究せざるを得ざる状態になつた物と思は  
れる。然のみならず、新聞雜誌の外國から來る物に依つて見れば、佛國の如きも亦自己の戦敗に顧て、その  
欠點の一原因は教育に存する事を認め、戦中にも着々としてその改善に力め、而もその模範は寧之を敵國な  
るドイツに採つて居るといふ事である。這般の事實を綜合して之を考ふれば、ドイツが敵國であると云ふ事  
は云ふ迄もないが、其のドイツが何かの長所を有して居るといふ事は之を認めない譯には行かない。でこの  
長所は一体何所に存するかを研究するのは現今の主要なる問題の一であるが、今日は之について少しく述べ  
て見ようと思ふ。

一体ドイツ人は好んで *Vernünftig* 即合理的と和譯して居る 言葉を使用する。英語では之を *rational* とい  
ひ *reasonable* と云ふが之等の譯語と *Vernünftig* の意味は少し違ふので、同じ術語でも國々に依つて特別の  
意味のある言葉は之を完全に含ませて他國語に翻譯する事は出来ない。只臆氣に其の大体を表すに過ぎない  
ものである、故に合理的なる譯語は不完全な物である。斯る言葉は其の國の産物で、殊にモットーとなつて  
居る様な物には、當時の思想のコンデンスされて居る物が多いから、その意味を理解するには何うしても  
當時の思潮を知らなくてはならぬ、之を知つて始めてそのモットーの意味が理解される事になる。故に成可く  
ならば原語の儘用ひた方がよく徹底するが強て譯せば合理的でよからう。意味は *Vernünftig* に合ふと云ふ事

である。唯道理に合ふといふ事ではない、これには道理にも合ひ又理窟にも合ふといふ二つの意味があつて  
双方の要求に適はなくてはならないから意味は深長である。かゝる意味深長なる言葉は我國に於ては哲學者  
か又は之を理解した人々の間にのみ行はれて居る。ドイツでも昔は然うであつた。カントが始めてこの言葉  
を重い意味で用ゐた當時に於ては、此の語は一般人には到底理解出来ないもの、様に取扱はれて居たが、今  
日に於てはカントの此の思想は一般に普及して、彼等がカントと同様に理解して居るか否かは別問題として  
兎に角臺所の隅々迄も行渡つて居る事は事實である。總て専門學上の言葉が通俗化されるのが文化の進歩で  
一般人が之を用ひない所は學問が未だ一部の階級にのみ偏在して居る證據である。遺憾乍ら日本現在の状態  
では、俗人の言葉と學者の言葉は同一でなく、知識階級の人の用ひて居る専門學上の言葉は一般人には極  
めて不可解な物で、自分達は昔から有り來りの不正確な意味淺薄な言語を用ひて満足して居る。故に日本で  
學者が講演する場合には先づ用語の解釋からしてかゝらなければならぬから、時間の不經濟な上に、講演  
は講釋の様になつてしまふ。つまり専門の知識が社會多數の人々の共有物になつて居らないからである。私  
は常に云つて居る、文化とは何ぞやと云へば専門の知識の通俗化せらるゝ状態を云ふのであると。扱て同じ  
學問の通俗化と云つても、此頃流行するアメリカの *safety first* 安全第一と云ふ様な言葉は、唯昔の火の用  
心、おせんかすな馬肥せ位の意味で別に深い哲學的の意味は無い。唯是等は其の當時の社會的生活に對し  
て注意を惹くに足るの言葉なるが故に用ひられる丈の物で、哲學者は決して此の様な淺薄な言葉は用ひない  
ドイツ人であつたら恐らくはこの様なものは一笑に附してしまふであらうと思ふ。彼は常に好んで物の道理  
を研究する。又何事もプリンシプルを探し出す、假令それが *first principle* に至らなくても二義三義につき

とめなくては安心しない國民である故に、かゝる外形に表れた個々の事件について注意を與ふる如き言葉を以てモットーとする事はしない。要するに彼等は他の文明國民に比すれば何事に對しても深く考へる所の傾向を著く有して居る。此傾向は永い間に養ひ來つた所のもので、既に國民性の一ツになつて居る。カント、ヘーゲルの如き深刻な思想家を出したのは全く之に起因する物であつて、又之等の人々の深刻なる思想をアクトセプトして更に此の傾向を助長し來つた物と見なくてはならぬ。故に彼等はすべての生活に於て、萬人が永遠に使用して警語たるに足る様な言葉は、必ずや深く、廣い、プリンプルに觸れたものでなければ、満足の意を表さない事であらう。これが *fernünftig* なる言語が彼等の上流社會から下流社會に至る迄、恰く用ひられて居る所以であらうと思ふ。此の一言があれば他の警語は全く不用である。例ば、儉約せよとか、勉強せよ、時間を空費するな、規律を守れ、謙遜なれと云ふが如き個々の事は、フェルヌンフチヒである、といふ一語で皆盡きて居るのである。様々の薄つべらな思想を表す言葉を用ひてゆくと云ふ事は、自他共に不便な事で、之等すべてを云ひ表し、概括し、包含する所の言葉があれば之に越した事はない。つまり不得要領な長たらしい手紙よりも、電報で通信する方が反つて情も要も得て居ると同様である。充分に思想が發達し、且つ鍛鍊された者は各斯警語を喜んで使用するに違ない。之を用ふれば思想上の經濟となつて、所謂率の増進も不要となつて來る譯である。ドイツに於て此の言葉が恰く使用されて居る結果は、日本で所謂理窟詰めになるが、併し實際に於ては、少しも物事にソツがない、かの平時に於ける公園のベンチが、戦時の列車の腰掛に移されたと云ふ様な事は、ドイツの策略ある遣り方と見られて居るが、併し苟くも世の中を經營するのにフェルヌンフチヒに行かうとすれば、結局此所迄來なくてはならない物である。彼等の規律的な

のは、學校、軍隊の如き部分に於てのみではない、合理的ならざるべからずと云ふ見地に立つて取捨選擇するが故に、商工業より、家庭の料理の末に至る迄、國民のすべてが皆規律的なのである。陸軍が規律正しいと云ふのは、戦をするには是れ丈の規律が必要であるからと云ふのではなしに、規律を守ると云ふ事は合理的であるから、と云ふのに發して居るのである。英米人は獨人が合理的なりと信じてやつて居る行爲のあるものを目してケチン坊だと云つて居るが、彼等は英米人の、不用な事をするのを見て、非合理的だ、と云つて居る。故にドイツ人は、人の前も臆せず夫婦で一人前の皿をとつて半分づゝ食し、甚しきに至つては皿の汁迄もなめてしまつて一向平氣である。彼等は之は合理的な行爲で、飯は營養以外に食ふ必要はないと思つて居るのである。道理をよく解して居るが故に、自分が道理に合ふと思つた事は、人前を憚らずに之を爲して平氣である。これ一個人を向上せしめ、引ては國家を隆盛ならしめる所以であると云ふ固い信念を有して居つて、人の毀譽褒貶の如何に頓着せず、非合理的であるとして之を輕侮して居る。日本人が獨逸に在つて貧乏なのに無駄金を使ふのを見ては馬鹿であるとして居る、よし金があつても、必要な事をするのは馬鹿であるとして居る。贅澤をするから悪いと云ふのでなしに、理に合はないから悪いといふのである。

之を以て日本に於る一般の社會狀況に比べて見れば、大に反する所がある。殊に婦人の生活に於ては然りで、日本婦人の生活は全然毀譽褒貶に左右されて居ると云つてもよい。褒貶に對しては道理を問はず、盲目的に従つて居る。婦人として美服を纏ひ、容貌を整ると云ふ事は、主婦となつて相當の位地に立てば、之も合理的な事で恥る事はないが、學生として居る間に既に一家の主婦然として、容貌のみに氣を取られて居るのは、馬鹿らしい、非合理的な事である。即ち、その時期でないのにそれをするから非合理的なのである。

つまり物事を見るに、理性を繩墨として行動しきへすれば、その結果は批難の餘地がない。これこそ眞のつかみ所で、種々なる訓戒を加へても、その状況が異へば迷が出る、何所で所信を行つても、この一念さへを持つて居れば事は一直線に過ぎない。善悪の評語をするにも、先づ之がはつきりして居らなくてはならぬ。今日に於ては個々の訓戒を與へる事はあるが、短刀直入、理性の養成を忘却し、怠つて居る。この理性の養成に重きをおけば、今日女子の欠點なる幾多の性質も矯めらるゝ事と思ふ。我國に於て女子の教育が、案外長い時期を經過して居るにも拘らず、其の性質を矯むるに與りて力なきは、その根本に觸れて居ないからである。これから、諸子と共に先づこの根本義に觸れて進みたいと思ふ。近頃我國の海軍省でもドイツの今日在るを不思議となしたのか、深い哲學の根本概念に迄立ち入つてドイツ研究が始つたといふ事である。之は實に参考になる事で、殊に現今吾國に於る幾多女子の問題を解釋するのには最必要な事であらうと思ふ。

(大正六年十二月十五日、談話筆記、文責在幹事)

(6)

□途上雜記

文 一

カーンカーン、また金屬と金屬とを打合せ音は濕氣を帯びた朝の空氣を動かして聞えます。見るさ父さ子が大きな鐵材が何かの上で先のまくれたシヤベルをなをして居るのであります。二人とも一心にやつて居ます。子供は敵の額をならんでる劍術の先生の様な様子で、右足を前に踏み出してシヤベルの柄を固く握りしめて居ます。何さいふ可愛い努力であらう。私は、さうしてもこの可愛い努力をすてたくないと思ひました。ありつたけの努力をするさは何さいふ可愛い心であります。カーンカーンその音はまだきこえて居ます。ふり返つたけれども物のかげになつて見えませんでした。大方子供はまだ可愛い努力をつとめて居る事でせう。

感謝の辞

中川謙二郎

昨年六月余が校長の官を退き、随つて學術談話會との關係も表向は絶へたのであるが、當時學術談話會の會員たる生徒諸君は熱誠の溢れた送別の會を開き、尙ほ又翌七月發行の文科學術談話會々誌の上には、余の爲に特別な部面を設け、多數の誌面を此に割愛して、余に關する送序、詩、歌、感想録及び追懷記等を掲げられた。此さへ余にとつて過分の事である。然るに幾度か其の記事を繰り返し讀んで、會員諸君の余に對する敬愛の誠意の、斯程迄であつた事を知り得て、茲に更に深き感謝の意を表明する次第である。

回顧すれば、余の東京女子高等師範學校に關係したのは、會誌第十八號に余の略歴として示された通り、中々永い年月であつて、然も余の一生勤務した公職中の最も永いものである。斯る學校に校長として最後の七年間餘微力を捧げ得た事は、實に余の榮譽として亦深く感謝する所である。尤も此の七個年間、余に何等奏すべき功績も無つたのであるが、本會々員諸君の研究修養の年と與に進歩して來た事は、本會々誌を通覽すれば明に看取し得られる通りで、此は直接には會員諸君の爲に、間接には我が國の女子教育のために、欣喜措く能はざる所である。

茲に重ねて謝意を表し、本會々員諸君、益々壯健にして帝國の前途を深く顧念し、特に奮勵あらむ事を望むのである。

(7)